

高山

たかやま
高山の原生林を守る会

会報 第 66 号

2008年10月



西吾妻誘導ロープ補修ボランティア&ヒナザクラ観察会

7月6日(日)に西吾妻誘導ロープ補修ボランティア&ヒナザクラ観察会を実施しました。今回はデコ平(Aコース)と天元台(Bコース)側の2パーティに分かれて補修作業に当りました。

グランデコススキー場からゴンドラリフトを利用しての登山となるAコースは3名の参加でした。アオノツガザクラやミツバオウレン、チングルマ、イワカガミなどを愛でながら水場に到着。

昨年新たに設置したアルミのロープ保持用ピンは強度が懸念されましたが、曲がったピンは多いものの折れて再生出来ない物は3本程と思いのほか少なかったです。今回も追加して設置したので水場から西大巔への登り斜面にも幾つか設置する事ができました。

毎年同時期に行なうボランティアですが、水場上部には例年になく残雪が残っていて、ヒナザクラとの対比が一層綺麗に感じられました。下る途中で雨に遭うまで、お天気が持ってくれたのは幸いでした。



ヒナザクラ



作業模様



イワカガミ

登山道整備に参加して

今回の登山道整備に参加させていただくにあたり、様々な思いがありました。

私は、平成14年～19年までの6年間、国民体育大会山岳競技「縦走」の福島県代表選手として、「山」に携わってきました。（*国体出場6回のうち、優勝2回、準優勝2回、第5位入賞1回）もともと、マラソンランナーであり、「登山」の経験も無に等しい中で、山岳競技への参戦とあり、大自然の中を駆け回る新鮮さと感動は計り知れないものがあつた。

その縦走競技も昨年をもって国体から廃止。過去6年間山岳競技に携わり、数々の感動と栄光を味わわせていただいた、大自然への恩返しのお気持ちも込めて、今回の参加へと至ったわけである。大自然と触れ合い、年々、大自然の魅力に引き込まれていくのと同時に、この大自然がおかれている現状、そして自然環境問題への関心が高まった。

ファッション性、機能性も一昔前とは比べものにならないくらいに発達した登山用品。そして、交通機関（ロープウェイ等含）の発達により、より安全に、気軽に高山の山登りを楽しめる環境となった現代。

その一方で、自然に対するマナー、知識が追いついておらず、希少植物が生息する湿原の中を歩き回ったり、高山植物を採取したりといった行動をしてしまうハイカーがいるのも実状である。

また、地域経済事情から、地域おこし、町おこしのひとつとして、「自然との触れ合い」を取り入れようと安易に発案するケースが多々あるのだろうが、やはりその宣伝活動以上に、自然に対するマナー、知識も伝える必要があると感じる。

今回、整備場所となった、西吾妻山周辺においても、高山性植物が生息する湿原が崩れてきているのがよく分かった。登山道の幅が広がり、湿原の規模が縮小されつつある現状を目の当たりにした。この湿原として成り立つための心臓部である「泥炭層」。この泥炭層が生成されるまでには、数千年かかると今回初めて知った。人の命とは比べものにならない、この生成年月を知れば、大自然との触れ合いには、心構えが必要であるということがよく分かる。

私は今秋で30歳になる。それと同時に父親にもなる。今回、共に活動を行った、私の倍は生きておられるであろう方々の姿を見て、感謝の気持ちで胸が熱くなった。この大先輩方のおかげで、私はこの大自然の中を走り、感動を味わうことが出来るんだと実感した。そして、純粹に「自分たちも見せていただくことが出来たこの大自然の感動を、次世代へも残さなければ」と思った。

今まで「誰か」が、やっていた活動。今回、その「誰か」になれた誇りは大きい。その「誰か」になる勇氣。その勇氣が今の若人には必要だと感じた。まずは、今回、経験したことを私の隣の人へ伝えたいと思う。誘導ロープがなくても、自然環境と共存できる世の中にならなければ。自然は、自然のかたちが一番のはず（平成20年7月）。



作業終了

眞船 孝道



作業前



作業中



作業中



作業中

E-mail mafu555mafu@live.jp
+山と魂+ <http://ameblo.jp/555mafu555>

風景印の旅（3） 鎌田和子

前回の「風景印の旅(2)」で、ウラジログシをアラカシだと思い込んでいた話をしましたが、私はまだ本物のアラカシの樹木を見たことがなかったのです。

ところが、4月のある日、福島市の稲荷神社拝殿の左側に立っている樹木が、アラカシであると気がつきました。新しく伸びた枝から雄花の花穂が垂れ下がり、若葉が赤みを帯びて生き生きと輝いているのです。近づいて葉をよく観てみると、幅が広いのと鋸歯の具合から、その樹木はアラカシだと判断しました。そのことを、照葉樹に詳しい山内さんに話したところ、稲荷神社に行って確かめてくださいました。間違いなくアラカシだということです。山内さんの判断の根拠は葉の鋸歯と樹肌の特徴からのようです。私は、前回のアラカシとウラジログシの、葉の幅や鋸歯の学習を生かして、アラカシであると同定することができたとひとり密かに喜びました。

ヨーガの帰り道はいつも稲荷神社を通り抜けさせてもらっています。拝殿の右手にシラカシがあることは気づいていました。けれど、左手の樹木はアラカシであるなど思いもしませんでした。ヨーガの友人は必ず拝殿に一礼して通ります。私はその友人の姿と一緒に、拝殿の左手の樹木を目にしていたはずなのに気づかずに過ごしていたのです。「風景印の旅」がきっかけで、ようやくその樹木を照葉樹と意識し、若葉の輝くような美しさに出会うことができました。

山内さんは、拝殿の両側に照葉樹を配置することは縁起の良い常葉(ときわ)の樹を選んだものと推測しておられます。さらに、稲荷神社のアラカシは比較的樹齢の高い高木で、中通りではたいへん稀で、貴重な樹木なので大切に保存してほしいと願っておられました。

それにしても、右手のシラカシの木の下にはドングリが今でもたくさん落ちているのに、アラカシの木の下にはドングリが一つもないのはどうしてなのでしょう。アラカシの木を見つけた記念に、本物のアラカシの殻斗を拾いたいと思いましたが、殻斗どころか、ドングリ1個すら落ちていないのです。ちょうど、宮司が拝殿に向かって歩いてこられたので尋ねました。すると、宮司はドングリにならないカシの木だとおっしゃいます。ふう〜ん、そういうカシの木なのかと、その場では思いました。でも、あとになって、ドングリにならないことが不思議で気になってなりません。たくさんの雄花の花穂が垂れさがっています。雄花が咲いているのだもの、雌花だって咲いているはずでしょうに…?? どうして実を結ばないのかしら? 不思議でたまりません。枝を切り詰めると、ドングリはならないと本に載っていましたが、稲荷神社のアラカシはそれほど枝を切り詰めているようには見えませんでした。これはやっぱり、ヨーガの帰りに秋までずうっと観察を続けてみなければ納得できないと思ってしまう私でした。

意外に身近なところで、「風景印の旅」の続きを旅することになるうとは…。こうして、「照葉樹林の旅」も一緒に続いていきそうです。(2008. 5. 1)



アラカシの若葉

スダジイラインの意味するもの

今年の8月下旬、所用で、いわき市の小名浜にある福島海洋科学館「アクアマリンふくしま」に行った。去年も一度行っているのだが、あそこのすごいところは、単に水族館というだけでなく、陸と海との繋がりをうまく展示していることにある。言ってみれば、我々が生活している陸と海洋との接点を、後背湿地から海岸砂浜までの生態系変化のビオトープにしてしまう具体性に驚かされた。さらに、海人写真家古谷千佳子さんの写真展で、沖縄だけれども、人の生活と海との関わりを展示したり、沖縄(やんばる)のカエル展を開いたり、海と人、海と陸との関係にこだわる姿勢が、強く印象に残った。

ところで、海と陸との接点を自然史的に見るならば、いわき市の勿来地区から久之浜町末続地区にかけて、断

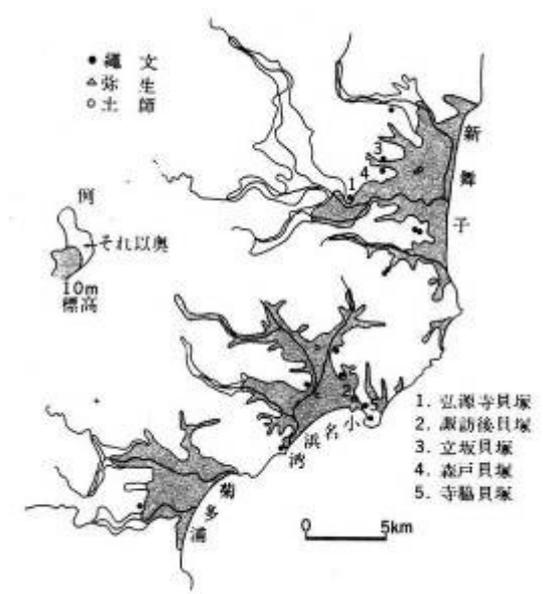
山内幹夫



いわき市平弘源寺南斜面のスダジイ林。現海岸線から5 km以上離れている。

続的にスダジイ(ブナ科シイ属)の自生が残っているが、スダジイの自生分布の連続を追って行くと、原始・古代における陸と海との接点について、実に具体的に表すことができることに気づいた。一昨年から、双葉郡南部における照葉樹林について調べて来たのだけれど、去年はいわき市に足を延ばして歩いてみた。ヒントになったのは、いわき市平市街地の東端、鎌田地区にある弘源寺の高台斜面に繁茂するスダジイである。弘源寺の高台には、縄文時代前期(今から約 6,000 年前)の貝塚がある。すなわち、その頃には、海が相当内陸部にまで入り込んでいたことを意味する。これは、東京湾周辺や、仙台湾周辺でも同じ現象が認められる縄文海進によるものであり、縄文時代早期末から前期初頭には、当時の地球温暖化により、現在よりも4m程、海水面の上昇があったことが推定されている。この温暖化によって、植生も変化するが、暖温帯照葉樹林が北上し、東北地方の海岸線において安定的に自生するようになったのは、今から約5,000年~4,500年前の、縄文時代中期頃ではないかと考えられる。話は戻るが、弘源寺のスダジイを見て、スダジイ自生地の連続は、古海岸線を表しているのではないかと気づいた次第である。

スダジイは、海岸線に沿った丘陵斜面部に密に繁茂する。いわき市では、現海岸線に沿って、沼の内地区から豊間地区、江名地区にかけての丘陵斜面に高い密度で自生が確認されているが、実は、平地区から草野・四ツ倉地区の、現海岸線からかなり離れた平野部に臨む丘陵斜面にも断続的に自生が認められている。そして久之浜町で、また、現海岸線に接近している。小名浜地区においても、藤原川に開析された平野部に沿った丘陵斜面で同じような現象が認められるようである。いわき市におけるスダジイは、ブナやミズナラ・コナラのように面的な広がった森林としては認められず、海岸線や平野部に沿った丘陵斜面部に繁茂し、その連続が帯状につながっているというのが現状である。



いわき市の古海岸線推定復元図
渡辺一雄 1969年



いわき市平弘源寺境内のスダジイ古木の根元 (樹齢は200年以上か)



弘源寺と国道6号線を挟んで向かい側の鎌田地区の丘陵斜面にも、スダジイを含む照葉樹叢が見られる。



いわき市豊間町八幡神社境内のスダジイ林。海岸線近くに位置する。

この連続について、植生史的な意味合いも含めて、スダジイラインと仮称しておきたい。

これから、いわき市の2万5千分之1地図にスダジイの自生地を印してゆきたいと思う。その作業によって断続的に繋がるスダジイラインは、旧海岸線に沿った、古い時代の照葉樹林の様相をいくばくかでも表すことができるのではないかと期待している。

スダジイなどの照葉樹林に限らず、森林には歴史がある。その歴史のなかには、地球規模の寒冷化や温暖化、その結果である海水面の下降や上昇などを反映したものも含まれる。そういった植生史を示す現在の林相をこれ以上破壊せずに保全し、今後に生かすのも今の人間の責務ではないかと思う。再び地球温暖化の危機が叫ばれている現在ではなおのこと。

東北ブナ紀行（31） 奥田 博

青森・秋田・岩手県の東北北部を終えて東南北部に入ったはずだが、久し振りに青森・下北の山々を訪れ、見事なブナに出会えたので戻りたい。青森といえばアオモリヒバ（ヒノキアスナロ）が、山のどこにでも点在している。概ねブナと混交している場合が多いのだが、標高が低いせいかわ杉の人工林も目立った。

59) 縫道石山

縫道石山に取り付いたのは、午後二時を回っていた。登山口には熊除け鈴の貸出箱が設置されており不安をかきたてる。登山口にはブナとアオモリヒバが並んで迎えている。今回の山旅を象徴する木々だ。ここは東北森林管理局青森分局によれば「佐井村字縫道石国有林2334林班」ということになる。登山道に入ると早速、太いブナが現れた。3人でやっと囲める太いブナも見られる。尾根に登り下りにつくと人工林となりブナは見られない。最低コルから再び登り、縫道石山の真下に来ると再び見事なブナが見られ、その間から岩山が覆い被さるようにそびえている。急坂に取り付き、やっとの思いで岩のテッペンに立てば陸奥湾や北海道が眺められた。豪快な山頂を楽しんだが、暗くなる前に登山口に着かないと、熊の餌食になってしまう！

コースタイム：登山口(30分)最低コル(40分)山頂(30分)コル(30分)登山口



縫道石山の3人囲みブナ

60) 大尽山（おおづくし）

霊場恐山の前に横たわる宇曾利山湖。その正面に端正な三角を湖面に映すのが大尽山だ。この一帯は森林生態系保護地域に指定された場所である。湖畔で準備をして歩き始める。ここから本格的な登山口までは湖畔を半周する水平道をたどる。周囲の花はすでに秋の花でアケボノソウ、ヤマトリカブト、林の中にはアケボノシュランが咲いていた。遠くに恐山の建物が眺められる。

登山口から大尽沢に沿っての道に入ると、見事なブナとヒバの森が現れる。写真にしようとする、どうしても明るいブナにカメラを向けてしまう。静かな森のたたずまいが広がる。一体地蔵と呼ばれる尾根までは太いブナが散見されたが、尾根にかかるとブナの樹径は細くなる。次第に笹藪が道を覆うようになると矮性化したブナに変わっていく。そして山頂に着く頃には雨になっていた。山頂からの展望も望めないまま、往路を戻った。

コースタイム：宇曾利山湖登山口(1時間)大尽沢登山口(1時間30分)一体地蔵尾根(40分)山頂(2時間30分)登山口



大尽山に広がるブナの森

61) 黒森山

朝飯前に登った420mの里山だった。北海道の見えるちぢり浜から少し入ると下北少年自然の家の駐車場となる。ここから歩き始める。最初はスギの植林の中を登るが、湿度が高く蒸し暑く汗を絞られる。やがて急斜面に取り付くと、植生は自然林となりミズナラ、トチノキ、ホオノキ、ハウチワカエデ、ブナなどの豊かな森だ。少年が歩けるようにコース道標もバッチリ。尾根に上ればブナの大木が目立つ。その先は、ヒバの森でこちらでも大木が見られるが、とにかく暗い。やがて鳥居と祠の建つ森に囲まれた山頂となった。モーニング・コーヒーを点てるが、海が見えたらもっとおいしかったらうに

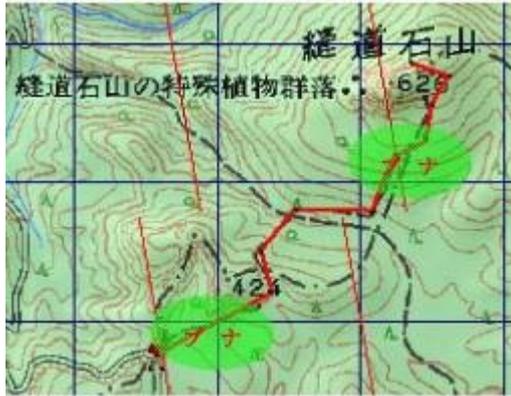


黒森山の大ブナ

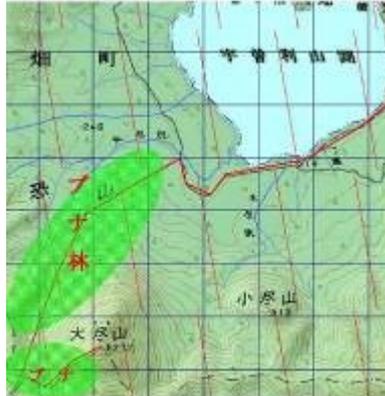
残念。

途中の分岐まで戻り、急な下山道にかかる。こちらも見事なブナがたくさん現れて、嬉しくなる。標高400m以下にあるブナだ。海が近くて温暖なのだろう。観音堂を過ぎると尾根から急な下りが待っている。沢をいくつか越えて下れば登山口に戻っていった。朝飯前の山であったが、すっかり汗をかいてしまった。下風呂温泉で汗を流してから朝食にありついた。縫道石山では時間に追われ、大尽山では雨に追われ、黒森山は朝飯に追われた山旅だった。

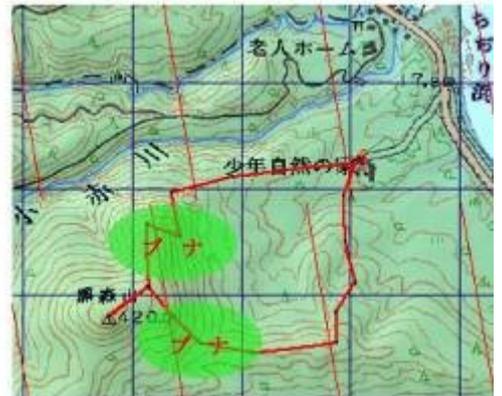
コースタイム：下北少年自然の家(1時間10分)山頂(30分)観音堂(30分)下北少年自然の家



縫道石山



大尽山



黒森山

鹿狼山から6 ～たった1個のツノハシバミ～

小幡 仁子

今日は日曜日。10時半に洗濯がようやく終わりお天気もまあまあなので、鹿狼山に登ることにする。駐車場にはどこかの地区の親子行事らしく、30人ほどが集まっていた。小学生の元気な声が響いていた。秋の鹿狼山は日曜日となればいつもこんな風である。

さて、今日のメインはツノハシバミの実がどうなっているかということだ。先週はたった1個しか残っていなかった。今年の春に雌花と雄花序を観察して、夏には角のある独特の形をした緑色の実が4、5個付いていたのである。もっとも、4、5個では今年もツノハシバミの実のお味見はできそうにないと思っていた。



この実はヘーゼルナッツと同じ味がすると本に書いてあったので、いつかは食べてみたいというのが私のささやかな願いである。今日見ると残念ながらツノハシバミの実は1つもなかった。落ちてしまったのかなあと、木の下を見たけれどそれらしいものもなかった。残念……。昨年も同じ頃に、実は全部なくなってしまった。だから、おそらくツノハシバミも栗みたいに、緑色から茶色に変色し中の堅果が熟して食べられるようになると思うのだが、その姿をまだ見ていない。図鑑には角状の果苞を剥いて取り出した堅果が載っていた。私がこんな堅果を見られるのはいつのことになるやら。

気が付くとツノハシバミの枝にもう小さな雄花序が付いていた。これが来春までにはずいぶん長くなるのだからおもしろい。雌花は、これが変わっていて、芽鱗の先に赤い柱頭がヒラヒラと出ている。ルーペでのぞくと赤い炎が燃えているようでもあり、不思議な世界である。

最近の一つ一つの植物の花から実までの姿を見てみたいと思い、鹿狼山に登っている。沢山の植物があるので、そんなに数多くは確認できない。今年は、ツノハシバミの他にオトコヨウゾメの花から実への変化などもおもしろかった。白い花が終わると緑色のつやつやした実が柄に垂れ下がる。それが黄色からオレンジ色になり、今は赤色に近づきつつある。ヤマボウシも時々見ていたので、春になって緑色の花びらが沢山出てきたのには驚いた。ヤマボウシの花は白いものだとは頭から信じ込んでいたのである。花びらのように見えるのが総苞片だということも図鑑を見て始めて知った。

この次は、ウラジロノキとアオハダの花を見たいと思っている。この木は鹿狼山に隣同士で並んでいる。どちらも実の方はすでに見ているが、花の方にはまだ会えないでいる。それから、イヌブナの花と実も見たい。まだまだ鹿狼山通いは続きそうである。

ヤマモミジ (*Acer palmatum* var. *matsumurae* カエデ科カエデ属)

イロハモミジの亜種に分類されている落葉高木。日本海多雪地型植生とされ、太平洋型植生のオオモミジと対比されるが、福島では鹿狼山や国見山など太平洋沿岸の山でも普通に植生している。

葉は対生で、形は掌状葉である。掌状脈を中心に5～9個に深く裂ける。裂片の先端は長くとがり、各片の周縁は著しい欠刻状の重鋸歯がある。裂片の大きさは不ぞろいで、中央の3辺が大きく長い。裂片の数が5個の個体はイロハモミジによく似ている。ブナと同様に葉の成長は前年の貯蔵養分でまかなわれるため樹全体の葉の大きさはそろっている。

花は雌雄同株。葉腋から複散房花序を下垂し、同一の花序に雄花と両性花が混在する。小花はがく、花弁ともに5片あり、がくは赤色、花びらは緑白色で赤色の脈がある。雄しべは8個で葯は黄色である。果実の翼果の角度は鈍角～やや鋭角で、初夏の頃には緑白の地に赤く着色し美しい。イロハモミジの翼果の角度はほぼ水平なので区別できる。

冬芽は仮頂芽タイプで、通常は枝の先端に2個の冬芽をつける。植生域が重なるハウチワカエデと比較して枝が細く、冬芽も小さい。冬芽の中には翌年に展開する葉が全て収まっている。林冠の小さなギャップ(日の当たる空間)でも発芽更新しやすいので、成熟した森林でも若い株を観察することが多い。

吾妻・安達太良山域での代表的なカエデである。特にミズナラ林からブナ林にかけての沼地や沢の近くで多いように感じる。ハウチワカエデと比較して花の姿は質素で繊細。そのため、注意して観察しないと花を見逃してしまうことも多いが、果実は花とは対照的で、赤い衣をまとった姿に、思わず見入ってしまう。秋口は光の条件により紅葉と黄葉が混在するので緑の葉を交えたグラデーションがよく映える。また、若い枝は冬でも緑色を呈しているなので、冬の森では瑞々しい緑の株がよく目立つ。

ミヤマハンノキ (*Alnus maximowiczii* カバノキ科ハンノキ属)

亜高山帯～高山帯に生える落葉低木。パイオニア種(遷移初期種)として噴火経歴のある山頂周辺の裸地や風衝地にいち早く侵入しミヤマハンノキ林を形成する。生長が早く、萌芽性に富む。

葉は互生。ダケカンバの葉を一回り小さくしたような形で先端は尖り、彫りの深い側脈が羽状に走る。葉縁には細かい重鋸歯がある。葉裏に腺点があり、発芽間もない時期には粘りがある。

花は雌雄同株。雄花は純正花芽で雌花より先端に着き、雌花は混合花芽で2枚の葉の先に散房状の有柄花序を直立させる。この雄花と雌花の位置関係は同じパイオニア植物のダケカンバ、ヤシャブシと共通している。雌花の雌しべは初め透明感のある白であるが次第に穂の先端から鮮やかな赤に変色する。花には甘い香りがある。

冬芽の鱗片は2枚で黒味を帯びた茶色で粘りがある。幹は柔軟で雪の圧力にも湾曲して適応する。幹肌は滑らかだが皮目がかなり大きく目立つ。

ミヤマハンノキは、根粒菌と共生しているため空中窒素を固定して栄養分とすることができる。葉の窒素含有量が多く、緑色を保持したままで落葉するため土地を肥やす効果が高く「肥料木」としても有名である。根は礫を包み込んで固定する性質が強いため崩壊地の保全植物として期待されている。

吾妻連峰の浄土平、安達太良連峰では鬼面山や前が岳、磐梯山では沼の平でまとまったミヤマハンノキ林が形成されている。山域と標高により共存する樹種が異なっており、ダケカンバ(浄土平)、ブナ(鬼面山)、ヤシャブシ(前が岳)、ヒメヤシャブシ、アキグミ(磐梯山)などが山の植生を特徴付けている。開花期を迎えたミヤマハンノキの姿は、雄花の鮮やかな黄色とその上に開きかけた葉の緑、その間から突き出た雌花の赤がバランスよく散らばり、漂う甘い香りと相まってなかなかぎやかである。



第 100 回自然観察会案内：幕川から高山の紅葉観察会

日時：10月19日（日）7：00～16：00

集合場所：四季の里交差点正面入口駐車場：集合時間7：00

参加定員：20名

内容：幕川温泉からスカイライン、鳥子平、高山山頂までのコースを往復し、ブナ林からオオシラビソ林の植生や紅葉を観察し、登山道のペンキマークや道路周辺の植生状況を検証します。

準備するもの：昼食、登山靴・長靴等、雨具、スパッツ類、防寒具、手袋、帽子、着替、昼食、水筒、嗜好品、ゴミ袋、筆記用具、メモ帳

参加費：保険代（300円） 申し込み：10月18日（土）まで

* その他不明な点があれば申し込み時にご相談下さい。

参加申込先：高橋淳一（TEL 024-593-1990）または佐藤守（TEL 024-593-0188）

電話またはメールにてお申し込みください。

（電話申込は夜間7時～9時でお願いします）

なお先に案内いたしました前夜祭は参加者少数につき中止とします。

第 101 回自然観察会案内：霊山 中世の歴史探訪と岩峰の自然・総会

日時：11月30日（日）7：00～15：30

集合場所：小鳥の森第1駐車場 集合時間：7：00 参加定員：30名（総会は定員無し）

内容：国指定史跡霊山を歩き、紅葉が残る雄大な岩峰を満喫するとともに、晩秋の自然を観察。併せて国司館や霊山城跡などの南北朝時代の史跡を探訪いたします。芋煮会も開催。その後「りょうぜん紅彩館」に移動して休憩（お風呂も楽しめます）し、13時30分より平成20年度総会を開催いたします。

準備するもの：昼食、登山靴・長靴等、雨具、スパッツ類、防寒具、手袋、帽子、着替、昼食、水筒、嗜好品、ゴミ袋、筆記用具、メモ帳

参加費：保険代（300円） 申し込み：11月29日（土）まで

* その他不明な点があれば申し込み時にご相談下さい。

参加申込先：高橋淳一（024-593-1990・080-3320-1804）または佐藤守（024-593-0188）

電話またはメールにてお申し込みください。

（電話申込は午後7時～9時でお願いします）。

新年度の会費納入をお願いします：郵便振替02170-0-24351「高山の原生林を守る会」へ

【編集後記】 ■雨の予報がはずれたゴールデンウィークの半ば、前から気になっていた不動湯近くの県有林道の末端まで行ってみた。道は黒沢まで拓かれ、砂防ダムが整備されていた。この林道はそのための工事道路だったらしい■堰堤にはオオバヤシャブシが植林されていた。帰ろうとふと振り返ったら白一色の斜面が目に入った。ニリンソウの大群落であった■その中に踏跡を見つけた。たどるとその末端にはケヤキの「あがりこ」の太木がひかえていた■帰り道にカモシカに遭遇した。この春2度目である■林道入り口の伐採地では3、4年生と思われるブナの稚樹が1本。それは、「ここは私の住処です。人間の手を借りずともここはブナ林に戻ります。」と語りかけているようであった。陰樹であるブナの稚樹の行末を案じつつ帰路について（MS記）。



「高山」高山の原生林を守る会会報 第66号 2008年10月発行

編集・発行：高山の原生林を守る会 HP：<http://www15.plala.or.jp/adumatakayama/index.htm>

代表連絡先：高橋淳一 Phone 024-593-1990（夜間7時～9時）

郵便振替：02170-0-24351 「高山の原生林を守る会」

入会方法：年会費（500円）を添えて上記まで

編集：佐藤・奥田・鈴木